「ゴール」を明確にした授業（国語・総合）と学習発表会の取り組み

―― マレーシア・ジョホール日本人学校での実践から ――

前在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校　教諭
岩手県二戸市立金田一中学校　指導教諭　辻　村　順　子

キーワード：現地校外学習、スカイプ授業、国語科、学習発表会、郷土愛

１．はじめに

「マレー系　チャイニーズ系　インド系　不思議な街の一人となれり」。

これは、マレーシアのジョホール日本人学校で担任した中学生の一人が詠んだ短歌である。この歌の通り、マレーシアは多民族国家であり、異なる宗教の人々が平和に暮らす不思議な国だった。しかし、このことが、日本という国で育った私たちにとっても子供たちにとっても、最も強く「民族とは」「郷土とは」について考えさせることにつながったと思う。

２．３年間の日本人学校での指導経験

たった３年間の貴重な派遣期間だが、幸いにも中学校１年担任・国際交流担当・小学校４年担任と、毎年違う経験を積むことができた。

その中で、特に国語科と総合的な学習の時間の授業、学習発表会での劇について、述べたい。

３．現地での取材を「発信する」

子どもたちは、全国各地から転校してきて、個々の文化をのびのびと出しきれない寂しさも抱えている。それにより、現地での生活を否定的に感じてしまうこともある。

そこで、マレーシアでの生活や自己の在り方を肯定的・主体的に考えていくことをねらいとし、「発信＝相手を意識した表現活動」に楽しく取り組ませようと考えた。

(1) 日本の小学校とスカイプで交流

①「マレー村」校外学習

小学４年生の総合的な学習の時間にマレーシアの文化や自然について、文化施設「マレー村」への校外学習で体験的に学ぶ計画を立てた。活動のねらいを明確にし、意欲を更に高めるため、校外学習のねらいを、マレー村で調べたことを、「日本の小学生に伝えよう」とした。

②静岡市の小学校に「Skype」でクイズ

マレーシアの植物や食文化、伝統的な楽器や産業などについて、「マレーシア・クイズ」を作成し、前年度に帰国した派遣教員の在籍する静岡市の小学校に協力をお願いして、クイズに答えてもらうスカイプ授業を行った。静岡の小学校からは、東京での修学旅行の様子を伝えてもらった。

〈マレーシアクイズの例〉

・バナナの花は何色でしょう？

・ココナッツの「ココ」は、ある動物を指します。なんという動物でしょう？

・カカオの実の中の種は、どんな味？

③意欲が向上

前年度、自分たちに理科の授業をしてくれて大好きだった先生の顔が見られることもあり、子どもたちは大変意欲的に調べたり問題を作ったりした。楽しく「伝える」という目的が明確であったことにより、取材

校外学習で見聞きしてきたことを、静岡市の小学６年生に「マレーシアクイズ」として出題する様子

もマレーシア独特の文化をどのように伝えると楽しんでもらえるか、わかりやすいかという観点が生まれ、児童の取り組み姿勢に高い意欲が見られた。

(2) 小４国語科 ～危険防止「壁新聞」の作成

マレーシア生活の中で危険な場所や行動などの注意事項を調査することにより、現地生活について、主体的に考える機会とした。また、調査方法はコミュニケーション力を高められるよう、聞き取りで行うようにした。

	主なテーマ	調査した内容	聞いた相手
1	「非常口」や「助けて」などの表記・表現	児童たちは、日常生活の中でほとんど現地の言葉を使うことがなく、挨拶表現程度しか知らない。そこで、万が一の場合に備えて、危険を回避したり助けを求めたりする方法について調べた。英語とマレー語、中国語の表現と表記を聞いた。	マレー人の用務員さん
2	身近な感染症	日本でも感染者が出て、広く知られた「デング熱」の怖さや感染経路、蚊を発生させないような注意点、またヘイズ（Haze: 煙害）の恐ろしさや注意点について調べた。	保健の先生
3	誘拐や強盗が発生した場所	日本人を狙った誘拐や強盗などの事件が発生した場所を地図にして説明し、注意を呼びかけた。	現地に長い日本人事務員さん
4	落雷や飲み水	地震がない一方、落雷やスコール、渇水や断水の多いマレーシアでは、自然環境との付き合い方にも注意が必要である。	マレー人事務員さん

書く学習では、調べたことを「誰に、何の目的で」伝えるかが、大切である。事前に「相手意識」「目的意識」を明確にして、学習活動を進める必要がある。「理解」から「表現」に変換していくときの重要なポイントである。

この壁新聞は、日本に帰国する際持ち帰り、中学校の廊下に掲示したが、他のマレーシアに関する資料と比較して、中学生が特に興味を持って読んでいた。

(3) 日本人学校だからできた ～小４方言劇「ユタと不思議な仲間たち」

①「２分の１成人式」に向けて

小４は、生まれて10年目。全国的に「２分の１成人式」という儀式的行事が行われている。小４担任は初めてだが、２月に計画した「２分の１成人式」に向けて、学年の学びを集約していくことにした。

②命の大切さを考えるために ～劇「ユタと不思議な仲間たち」

「生きたくても生きられなかった」「食べるものがなくて、成長できなかった」「親に捨てられた」座敷わ

らしの悲しみを訴えさせることで、今ある自分たちがいかに恵まれた存在であるかを知り、感謝の気持ちを芽生えさせることができた。

③日本人学校ならではの「全国各地の方言劇」

学級には、北海道・岩手・東京・神奈川・大阪・岡山・福岡の子どもたちがいた。台本を共通語で書き、それぞれの家庭の協力をお願いし、夏休み中に家族と一緒に方言に書き直してもらった。

④劇中の「お国自慢」

劇中に「ついたら食べよう」という劇を入れ、「自分の故郷こそが日本一！」という「ふるさと自慢」を全員のセリフに入れた。一人ひとりが熱心に調べ、郷土料理や特産物を、張り切って独特の方言でPRすることができた。

日本を離れて暮らす子どもたちの、愛郷心をのびのびと発揮させることができた。

⑤その後の変化

方言劇に取り組んでから、教室内にそれぞれに解放されたお国言葉が飛び交い、声や表情がますます明るくなった。また、お互いの方言を聞きあったり、真似し合ったりして遊ぶこともあり、文化の認め合いが感じられた。

また、岩手県の妖怪「座敷童」を知ったことで、日本各地に言い伝えられている「お化け」「妖怪」について調べたくなり、その土地の文化や言い伝えについて勉強するきっかけにもなった。

一番大きな変化は、この劇のあと、教室の中が一層開放的になったことである。

４．日本人学校の特質を生かす

日本人学校の特質は様々あるが、良さとしては一般的に外国語の習得しやすい環境であることや保護者が教育熱心であることなどがあげられるだろう。また、不足している経験としては、子どもたちが外に自由に遊びに出かけたり、大人になるまで長くつきあう友達を得たりすることの難しさなどがある。

いずれにしても、日本と同じ学校教育を受けられるよう努力するだけなく、彼らにとって気持ちや活動で不足しがちな部分を補ってあげることも必要だと考える。

在外教育施設で明るく元気に学ぶ子供たち、そして派遣教員である私たちに訪れるのは、繰り返される「出会いと別れ」。ここにいる子どもたちは、「出会い」の喜びと貴重さ、素晴らしさを身にしみて理解している。